

My Journey, My Dream

2014年度採用
カーターセンターインターンシップ奨学生

梶野 杏奈さん
ANNA KAJINO

AAR Japan (難民を助ける会)
プログラムコーディネーター

2014年 法政大学グローバル教養学部卒業
2014年 カーターセンターインターン
2015年 AARJapan (認定NPO法人 難民を助ける会)
プログラム コーディネーター
アフガニスタンとスーダンにおける事業を担当後、
現在はミャンマーに渡り、職業訓練校の事業に着手

世界各地で撤去された地雷 (AAR所蔵) を前に

現地の声に耳を傾けて信頼関係を構築 人材育成に注力するアプローチで国際協力を

AAR Japan で担当されていたアフガニスタンとスーダンのプログラムでは、どのような活動をされていたのですか。

アフガニスタンとスーダンでは合計5つの事業を担当してきました。アフガニスタンでは包括的地雷対策とアフガン帰還民支援という緊急支援事業を、スーダンでは水衛生・環境改善の事業と地雷対策事業の他、マイセトーマ (真菌性菌腫) という病気対策事業を行っていました。

アフガン帰還民支援というのは、隣国のパキスタンやイランに逃れた難民がアフガニスタンに帰国するための支援でしょうか。

はい。2016年にパキスタン政府が国内のアフガニスタン難民を帰還させる政策を強化し、パキスタン国境付近にはアフガニスタン難民が押し寄せています。た

だ、こうした難民の登録証を持っている人は国連からの支援もあり、ある程度恵まれているともいえます。国際条約で難民として保護されない『国内避難民』および『非登録帰還民』と呼ばれる人たちを含め、国際社会からの注目を受けにくい人々に対し、物資配布などの事業を行っています。

現在、日本の外務省はアフガニスタンへの日本人の渡航をやめるよう勧告しています。現地スタッフとの連携はどうされていますか。

おっしゃるように現在は治安が不安定なため、アフガニスタンの事業管理拠点はパキスタンに置き、毎月アフガニスタンの現地スタッフと日本の担当者がパキスタンに集まります。アフガニスタン事業のドナーは外務省なので、外務省に出

向いての会議参加や事業内容の交渉、報告書の提出といった業務も担っています。本部にいと『ドナーへの説明責任をどう果たすか』という視点になりがちですが、現地では「様々な課題に対する問題意識から全てのニーズに対応しなければならない」という視点に寄ることも多く、タイムリーかつ質の高い支援ができるよう、時には意見の妥協点を探ることが大事だと思っています。

スーダンも2005年まで内戦状態にありました。こちらでの3つの事業について教えてください。

まず水衛生環境の改善事業では、給水設備の改修、トイレの建設といったインフラ整備だけでなく、これらを維持管理できるようボランティアを育成しています。2つ目の地雷対策事業では、各村を回って、地雷

事故を回避するための講習会を開催したり、地雷被害者に対し補助具、リハビリ、カウンセリングの提供、生計支援などを実施しています。3つ目は、2016年に初めてWHOの『顧みられない熱帯病』の公式リストに第18番目と位置づけられた『マイセトーマ』 (真菌性菌腫) という感染症への対策として、農村地における啓発講習会の実施や、マイセトーマによって手足を失ってしまった方々へのリハビリや義肢装具製造の支援を行っています。

『マイセトーマ』は地元住民に周知された感染症なのでしょうか。

スーダンで地雷対策実施のための情報収集を様々な関係機関で行うなかで、一部の地域では地雷被害によって手足を失う人よりも、マイセトーマによって手足を失う人の方が多いことがわかりました。現在でも原因はわからないし、薬はありませんが、感染すると腕、足、背中のどこにでも発症して化膿していくため、ひどくなると切断しか選択肢がないのです。また、体の部位が変形することもあり、村によっては「呪われている」といった誤った認識をしてしまうケースも。啓発活動と情報共有が第一のステップになるので、啓発ラジオ番組を作成したり、各地で講習会を開き、マイセトーマの症状、裸足での生活による感染リスク、伝統的治療の危険性、早期治療の必要性などの基礎的な知識を住民に伝えています。

現地の方と密接に関わる事業ばかりですね。コミュニケーションを重ねられるなかで、様々な経験をされたのではないのでしょうか。

ええ。スーダン国立の義肢装具製造の

施設に訪れた時、地雷を踏んで左足を失った元トラック運転手の男性と出会いました。仕事を失い、心が不安定となっていた彼から『なぜ日本人がこんなところにいるのか! ?』と怒鳴られたのです。ただ、その後の交流を通して、『国連のファンドで、スーダンから地雷をなくす活動をしている』ことがわかったと、『日本からわざわざスーダンに来て支援してくれるなんて……。地雷被害に遭わなければあなたとも会えなかったし、日本のような遠い国から自分のような地雷被害者のために支援してくれている人がいることを知ることもなかった』と感謝の言葉までいただきました。このような場に立ち会うたび、働くモチベーションを保つのに重要なのは、常に『自分は“誰のため”に毎日動いているのかを考えながら仕事をする』ことだと実感します。

日本でも現地でも、重大な責務の伴うお仕事であることがわかりました。何をきっかけに、海外の問題に目を向け、自身で尽力したいという考えが芽生えたのですか。

幼い頃から家族とオーストラリアやアメリカで生活していた経験があり、ちょうど小学校高学年で日本に帰国した直後、『9・11』が起これ、なぜ世界中の人々が平和に暮らせないのかという疑問だけが残りました。大学ではグローバル教養学部で国際関係論を専攻しましたが、セオリーや考え方の学びや教授や仲間とのディスカッションは有意義だったものの、世界各地で起こっている事象を現場で見ることなく議論することに疑問を感じずにはいられませんでした。

大学卒業後、カーターセンターインターンシップ奨学生の道を志したのですね。

カーターセンターでの数々の出会いは、かけがえのないものになりました。スーパーバイザーと呼ばれる上司から学べた経験、そして、カーター元大統領とも食事をしながら会話できる機会などがありました。カーターさんに、数々の複雑な国際問題に取り組んできたことについて「一瞬でも希望を失いかけたことはありませんでしたか」と質問したことがあります。その答えは『There is no time to be hopeless (希望を失っている余裕なんてないよ)』。この言葉を聞き、「なんと情けない質問をしたのか」と自分の甘い姿勢に恥を感じるとともにカーターさんの平和に対する強い意志が、自分の心にもすごく響きました。

梶野さんの活動も、長い時間をかけて、信念をもって続けていくことが欠かせないと思います。カーターさんのお考えと一致しそうですね。

支援物資を配るだけでなく、メンタリティを含めた意識改革が必要な状況も多いです。辛抱強く取り組む姿勢こそが、一番重要だと思っています。そして、スーダンでもパキスタンでも感じたのは、現地での日本への印象がすごく良いということです。それはきっと、日本の外交が深く関係しているのでしょう。日本による国際協力のメソッドは、人材育成に注力するアプローチであると確信しています。



取材日：2017年8月10日

私の Switch

劇場での芸術鑑賞で異空間にトリップ

劇場を訪れるのが好きで、バレエからオーケストラ、ミュージカルまで幅広く鑑賞します。劇場では目の前で行われていることに意識を集中することができ、現実から離れられるところがいいのかもしれません。出張が続くなどしてなかなか観劇できない時はヨガをやっています。瞑想もストレッチも同時にできてリラックスできます。

